

歴史の再教育最優先

先号に続き普考之著「知恵なくば、国起らず！ 誇りなくば、国護れず！」の問題提起に対して感じたことを述べる。旧社会党は日本がソ連に征服されることを目標にした。沖繩を見れば解るとおり現野党は日本が中国の属州になればいいと思っている。左寄りの歴史観の威力は侮れない。

明確になった研修講師の使命

普考之は第九章「再び日本人らしい日本人として」でこう言う。

「理想（夢）を失った民族、全ての価値を物でとらえ、心の価値を失った民族、自国の歴史を忘れた民族。このような民族は滅亡すると世界の歴史が書いています。（中略）自国の歴史を学ばず、自ら人生を歩むうえで社会貢献どころか、何の働きも考えず、こたなく、ひたすら私生活での物質的充実ばかり追い求める一部国民の生き方は、日本民族の滅亡へ向かっているような気がします。」

「第一講師 正木元の感想」
「現代の日本と近未来の日本の問題がよく分かった。安全保障、自虐史観、戦前教育、この三点の誤認識が日本をダメにしていた。私も誤認していた。誤認だけならばまだよいが、反発や嫌悪などのマイナス感情を抱いていた。たとえば言葉のイメージがそう。愛と心、義勇、勅語、修身と聞いただけで軍国主義の悪い日本を想像していた。」

「第二講師 緑川撰也の感想」
「歴史の真実を学ぶということとは、ただ大事か考えさせられるだけではない。反発や嫌悪など、自虐史観。私も植え付けられていた一人だった。侵略戦争を始めたのは日本と教えられてきた。」

「主任講師 坂口英生の感想」
「私は教育に携わる人間である。使命は『家庭教育の再教育、学校

教育の再教育』である。家庭や学校で教わってこなかったこと、身につけてこなかったことを教えていかねばならない。

「自由」には「秩序」が、「権利」には「義務」が、そして「平等」には「格差」が付いて回り、それぞれの「平衡」を保つことによつて、他者とうまくやっていくことができるのだというを理解させいかねばならない。

「自由」には「秩序」が、「権利」には「義務」が、そして「平等」には「格差」が付いて回り、それぞれの「平衡」を保つことによつて、他者とうまくやっていくことができるのだというを理解させいかねばならない。

「主任講師 浜中孝之の感想」
「外からだけではない。内からも日本を貶める勢力は多い。驚いたのは、憲法九条にノーベル平和賞を推す日本人、との記述である。日本パプテスト連盟会員だといふ。そしてその運動を推進しているのは共産党と民進党！」

「主任講師 濱中孝之の感想」
「外からだけではない。内からも日本を貶める勢力は多い。驚いたのは、憲法九条にノーベル平和賞を推す日本人、との記述である。日本パプテスト連盟会員だといふ。そしてその運動を推進しているのは共産党と民進党！」

「主任講師 坂口英生の感想」
「私は教育に携わる人間である。使命は『家庭教育の再教育、学校教育の再教育』である。家庭や学校で教わってこなかったこと、身につけてこなかったことを教えていかねばならない。」

「主任講師 坂口英生の感想」
「私は教育に携わる人間である。使命は『家庭教育の再教育、学校教育の再教育』である。家庭や学校で教わってこなかったこと、身につけてこなかったことを教えていかねばならない。」

「主任講師 坂口英生の感想」
「私は教育に携わる人間である。使命は『家庭教育の再教育、学校教育の再教育』である。家庭や学校で教わってこなかったこと、身につけてこなかったことを教えていかねばならない。」

「主任講師 坂口英生の感想」
「私は教育に携わる人間である。使命は『家庭教育の再教育、学校教育の再教育』である。家庭や学校で教わってこなかったこと、身につけてこなかったことを教えていかねばならない。」

経営管理講座 333 染谷和巳

この知識教養人格を貫く柱が別の見方考え方つまり「意識」であり別の言葉では「精神」である。それはかつての武士道であり武士道は義と仁に集約される。現在も日本人の精神は武士道であるべきだが、民主的個人主義がはびこりその復活を阻んでいる。会社は政治に深入りしてはならないが歴史教育を疎かにしてはならない。これからも研修では国と祖先を尊重する教育をしていく。

第三の国難克服の具体的方法

幸い新聞は正論派の産経読売一千万部対反対派の朝日毎日東京中日一千万部と互角である。安倍内閣支持五〇％、不支持五〇％はその表れであろう。

安倍総理は戦後の総理大臣のうちで一人抜けて、日本の歴史と伝統と文化を土台にして「国を思う」優れた政治家である。正論派が初めて快適な腹具合で「そうだ、いぞ」と応援できる総理大臣である。朝日や毎日にとつて不愉快極まりない日々が続いている。

もしこの一年で憲法改正ができなければ、また五十年遅れる。安倍内閣の残りの期間で日本が正常な道へ戻る可能性があり、この期を失えば絶望の年月が続くだろう。では第三の国難を克服するためにはどうすればいいか。普氏は「変化に対応するための知恵を身につけ、実践し、自立の心」を取り戻さなければならぬ」と言っている。私はより現実的な行動が必要だと思ふ。

たとえば正論派新聞の代表、産経新聞は営業が弱く、販売店網が荒く、部数の伸びが緩慢である。朝日読売のような強力な拡販戦略や組織もない。慰安婦の虚偽報道で朝日が四十万部、部数を減らし、それを産経に乗りかえさせる力が無い。産経の営業強化、これが第一の課題。

第二は反対派と同じ強力なデモ、座り込み、教宣活動をする。拡声器の大音響に対して黙ってはいられない。日当五千元で雇ってデモの人数を増やすなら、こつちも人数で負けてはならない。地道なピラ配りや会合も反対派と同じ規模で行う。心の中で「ばか者め」とつぶやくだけでは民意は動かせない。

第三は教育勅語の復活。正論派の経営者は社員に勅語を暗誦させ、毎日朝礼で唱和する。社員の家族に暗誦を義務付ける。妻子や孫に暗誦させコンテストを行い表彰する。教育勅語の文言が頭の中にも染み込んでいる人を一人でも多く増やすこと、教育勅語の意識を共有する同士をまわりに作っていくこと。

人間性の土台は正しい歴史観

この他にも第一講師横谷大輔は「自分という私」よりも人のため、会社のため国のためという「公」のために自分を活かす道をもう一度開いて太くしていかなくてはならない。武士道精神を持つていた私たち日本人には可能なことだと

「私には教育に携わる人間である。使命は『家庭教育の再教育、学校教育の再教育』である。家庭や学校で教わってこなかったこと、身につけてこなかったことを教えていかねばならない。」